



古道が紡ぐ物語



神君家康伊賀越えの道

(徳川家康最大の危機からの脱出行)

天正 10 (1582) 年 3 月に武田家を滅ぼし、天下統一を間近とした織田信長は同盟者徳川家康を安土に招き手厚い饗応でもてなした後、京、大阪、堺の見物を勧めた。6 月 2 日、明智光秀の謀反による本能寺の変で信長が横死したのはまさに家康一行の堺見物からの帰途であった。取り乱した家康は切腹を決意するが強く諫められ、領国三河への最短経路であり光秀の影響力も比較的薄い甲賀、伊賀を経ての脱出を決め、急使を飛ばして大和国衆の十市遠光とおいちとおみつに護衛の派遣を要請。また、宇治田原山口城の山口甚介など逃走経路の先々にも助勢を要請し、甲賀・伊賀の地侍や忍群の協力を得て 2 日後の 6 月 4 日には三河に着いた。ただ、探索を避けてたどった道筋は今も確定はされていない。

京都への帰途に本能寺の変を知る

徳川家康一行は、堺見物から京へ戻る途中、野崎観音で有名な河内飯盛山（大阪府大東市）付近で本能寺での変報に接した（場所には異説あり）。

供廻はわずか 34 名の少数であったが、後に徳川幕府草創期に活躍し四天王と賞された酒井忠次・本多忠勝・榊原康政・井伊直政を始め、石川数正、天野康景、大久保忠佐・忠隣、鳥居忠政などの精鋭中の精鋭が供をしていた。

この中には、伊賀忍者の支配層である「上忍三家」を出自とする服部半蔵も含まれていた。父の代に足利將軍家に仕えた後、早くから三河の松平（徳川）家に仕えており、この頃は家康軍の武将の一人とってよい。さらに、信長から案内役として付けられた長谷川秀一や家康に従ったばかりの元武田家の武将である穴山梅雪も従っていた。

また、京都での信長横死の急報を届けてきたのが、京都の豪商茶屋四郎次郎清延である。かつては家康に仕えた武士で、逃避行に必要な大金を携えて一行に加わっている。

伊賀越えに血路を拓く

織田方の主な軍団は、中国、北陸、関東方面の戦線に散らばり反撃はままならず、いずれ光秀軍や農民・野武士による落ち武者狩りも激しくなると取り乱した家康は、ここで一旦は切腹を決意する。しかし、本多忠勝が強く制し、本国へ戻り軍勢を整えた後に明智を誅伐するよう進言したことから、家康も何とか翻意し脱出を決心した。

この窮地からの脱出においては、長谷川秀一、服部半蔵が人脈を生かし、また、茶屋四郎次郎も先々で金銀を配り助勢を得ている。

木津川を渡り宇治田原へ

河内飯盛山辺りで変報に接した家康一行は、人目につかないよう、津田、尊延寺（ともに枚方市）から普賢寺、興戸こうと（ともに京田辺市）と東を目指す。現在ではこの辺りは関西文化学術研究都市が広がり、普賢寺谷を抜けると高台には同志社大学京田辺校地が望める。

その後一行は木津川に至り、今の山城大橋辺りにあった「草内の渡し」くさじ（京田辺市）から渡河するが、この頃には山口氏の家臣も出迎えに出て宇治田原へと案内した。ただ、途中から別行動をとった穴山梅雪一行は、この辺りで落ち武者狩りに遭い落命している。一説では、光秀に狙われることが必至の家康を避けての別行動ともいわれる。

宇治田原山口城で食事を摂った一行は、その後

府県	大阪	京 都	滋 賀	三 重	
伊賀越え行程（諸説あり）	津田・尊延寺（枚方市）	普賢寺・興戸（京田辺市） 草内の渡し（京田辺市） 山口城（宇治田原町） 湯屋谷（宇治田原町） 遍照院（宇治田原町）	小川城（甲賀市） 御斎峠（甲賀市）	音羽（伊賀市） 柘植（伊賀市） 加太峠（伊賀市・亀山市） 関（亀山市）	白子浜（鈴鹿市）



普賢寺谷を下ると、今では京奈和自動車道や同志社大学などが建設され、都市化している。

山口城址（宇治田原町郷之口）は、この辺りで盛んな茶畑になっている。



小川城址（甲賀市信楽町）からは付近が一望できる。家康が宿泊したのは、一説では麓の寺であったともいう。

近江と伊賀の国境にある御斎峠。地元資料では、今の国道307号線沿いの道を行ったとも。



浄土宗の寺院徳永寺（伊賀市柘植町）。家康から葵の御紋を許されたという。

最大の難所加太越え（伊賀市・亀山市）では、山賊などを二百余名討ち取ったとされる。



長谷川秀一の手配により近江信楽にある多羅尾光俊の小川城を目指す。甲賀の地侍多羅尾家は甲賀忍群の中心でもある甲賀五十三家の一つで、光俊は山口家に養子入りした山口甚介の実父である。

この道は、今は枚方市から信楽方面へ国道307号線が通じて様変わりしているが、宇治田原では旧街道がところどころに残り、また、古くから有名な茶処であり辺りには茶畑が広がる。

宇治田原町湯屋谷から奥山田に至る大福谷は、このあたりで最初に茶が栽培された地で「宇治田原茶発祥の地」とされ、また、現代の洗練された煎茶の製法、「青製煎茶製法」は湯屋谷の永谷宗円が元文3（1738）年に開発したもので、昭和35年には生家跡に記念の庵が建てられている。今の大手食品会社「永谷園」などの祖である。

大福谷を越えた奥山田の真言宗寺院遍照院では家康一行が休憩したと伝わっており、ここへ山口甚介からの急報を受けた信楽小川城の多羅尾光俊のもとから、二男久右衛門光太らが手勢を引き連れて到着し護衛も増え出した。

小川城に入った家康はここで一泊し、翌朝近江と伊賀の境にあり伊賀を見晴らせる御斎峠^{おとぎ}を越えた。また、この時に服部半蔵の手配により伊賀・

甲賀の忍者三百人が集まったという。

最大の難関加太越え

伊賀に入った一行は、音羽郷を経て柘植に至る。一説では、小川城からは遠回りである御斎峠を通らずに伊賀に入り、丸柱から柘植に至ったともいう。距離的には近いが、探索をくりながらの行動でもあり、実際のところはどうかであろう。

柘植に到着した一行は浄土宗徳永寺で休息（一説では宿泊）している。後に家康は、感謝の意を込め寺領を寄進し葵の御紋の使用を許したといい、同寺の屋根瓦や塀には今も葵紋が施されている。

柘植を出て東へ進むと、いよいよ古くから山賊のすみかともいわれた加太峠で、伊賀から伊勢へ抜ける最大の難所である。当時の資料として貴重な、家康家臣の松平家忠の残した「家忠日記」によると、ここで山賊などを二百余名討ち取ったとされているが、この時には家康一行にはかなりの警護が集まっていた。

そして、ようやく伊勢の国白子浜（鈴鹿市）に到着した家康は、海路三河を目指して出航。また後日、道中護衛を務めた伊賀・甲賀衆は徳川幕府に召し抱えられることとなった。

（山城 満）